

**「菌は語る：ミクロの開拓者たちの生きざまと知性」 星野 保 著 春秋社 2019年8月発行**

小生は、旭川高専・物質化学工学科の材料化学コースにほぼ等しい教育カリキュラムの大学の工学部を卒業した後、工学系・農学系・環境系が入り混じった学際コースの大学院に入学しました。そこで初めて微生物を使って研究をする専門分野と出会いました。北海道産ピート（泥炭）に住む細菌類を丸ごと利用して悪臭物質の除去フィルターにする研究でした。研究室の4名の教員陣は全員工学部出身でしたので、研究手法は工学ベースであり、細菌たちを「触媒」として捉える研究哲学です。ハッキリ言えば、「細菌類＝モノ」です。化学反応を進めるための触媒（化学物質＝モノ）と同じ扱いです。

大学院・修士を修了後に紆余曲折を経て、農学ベースの林産工学系の試験・研究機関に採用して貰いました。細菌類に代わって真菌類（カビ・キノコ）が研究材料です。住宅の床下で木材を分解（腐朽）するキノコ退治、食用・薬用キノコを生産する栽培技術の研究が担当業務でした。ここで、微生物を「生物」として捉える研究哲学と出会いました。微生物との接し方がほぼ180度異なります。とは言っても「殺す」か「増やす」かの工学手法がメインでしたので、生物である微生物に対する奥深い知識がなくとも対応できました。しかし、自分が執筆した学術論文の査読を受ける度にレフリーの先生方の指摘の陰にある、生物を扱う専門知識の奥深さに100%対応できない自分を認識するのです。

前置きが長すぎましたが、この図書には教科書の記述ではピンとこない個所の解説が満載です。学術論文のレフリーの先生方が身に付けている基礎知識をゲットできます。また、本書の主役微生物は芝生に病気を起こす「雪腐病菌（キノコの仲間）」で、著者の星野さん（本校で講演したこともあります）は雪腐病菌の生きざまを紹介しながら微生物学の奥深さをユニークな文章で記述しています。具体的には、教科書の行間にもない微生物の寿命、微生物の知性の有無まで踏み込んでいます。微生物学や応用微生物学に興味を持ったら、是非ご一読ください。今後の人生を楽しくしてくれる1冊です。